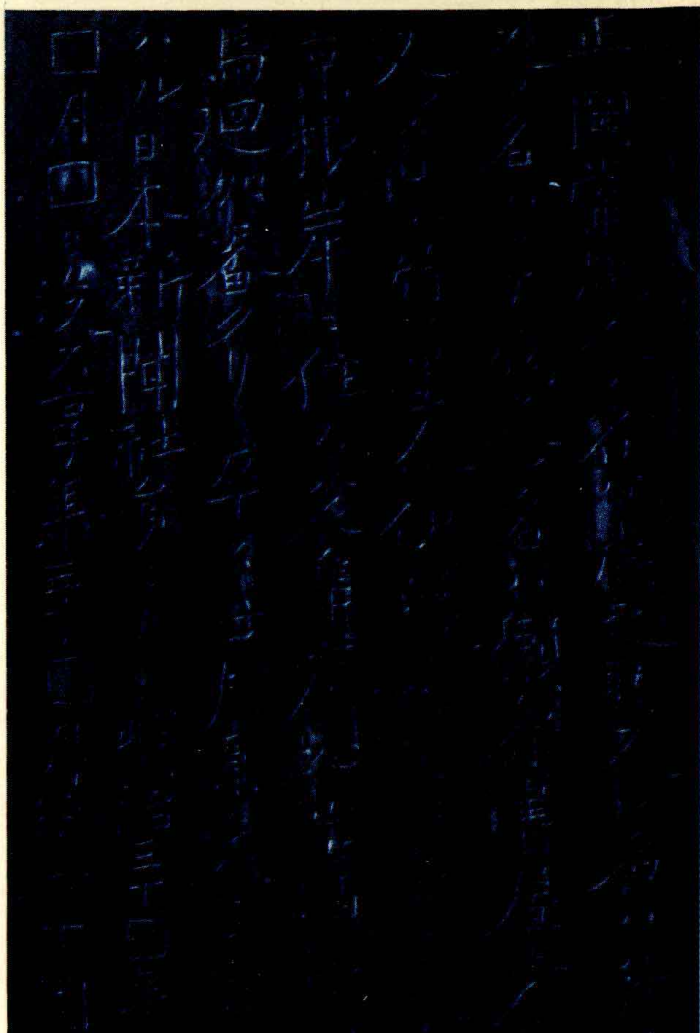


東京文学百景

志村士郎著



正岡子規自筆の墓碑銘
(北区田端町・大龍寺)

正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升
又ノ名ハ子規又ノ名ハ瀬祭書屋主人
又ノ名ハ竹ノ里人伊豫松山ニ生レ東
京根岸ニ住ス父隼太松山藩御
馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養
ハル日本新聞社員タリ明治三十〇年
〇月〇日没ス享年三十〇月給四十円

志村士郎著

東京文学百

有峰書店

志村 士郎

大正8年7月23日 東京に生まれる
東京文理科大学卒
東京都立小石川高等学校教諭・東京大学教育学部付属
高等学校講師・日本文学風土学会会員
昭和46年東京都教育委員会から教育研究奨励費を支給
された。研究題目「東京都における文学遺跡の調査な
らびに研究」

東京文学百景

¥ 850

昭和47年9月15日 印刷

昭和47年9月20日 発行

著 者 志村 士郎

発行人 酒井 節雄

発行所 有峰書店

東京都中央区銀座5-10-13

<検印廃止>

電話／東京 571-1487・振替東京 82910

0095-0019-0115

印刷・製本／芳山印刷株式会社

東京文学百景

序

このたび、畏友志村士郎君の「東京文学百景」が、有峰書店から出版されることになりました。心からお喜び申しあげます。志村君は東京文理大を卒業してから、東京都の高校の教諭を数年やっておりますが、やがて文部事務官として、東京教育大学の補導課に勤め、昭和四十六年には、東京都教育委員会から、教育研究奨励金を支給されて、「東京都における文学遺跡の調査ならびに研究」に努力しております。こうした永年の調査の結果が、今回の「東京文学百景」として実ったものであります。優秀な写真一五〇枚に重点を置いて、従来のいわゆる「文学散歩」型のもと、全く違った性格が、各所ににじみ出ているように思われます。従来の「文学散歩」の場合は、必然的に近代文学に偏向する傾向があったのですが、ここには、その欠点を克服して、著者の目指す独自の方向に進んでいて、大体成功しているものと考えます。わたくしは特に、その点を尊重すべきだと思います。

こうした出版は、固定したものが多いものなのですが、志村君は、この点異色があつて、派手ではないが、がっちりとして、その真髄に触れているように思われます。

今日のように、日ごとに都市の発展とともに、道路の整備や住宅、施設の増大に伴い、古い歴史の拠点となつてゐる史跡の崩壊も、日ごとに行なわれていることは、やむをえないことではありますが、本書の刊行は、姿を消した史跡の保存を意味するものと考えられるので、この書が、ことに多くの若い人びとに読まれ、老いたる人びとに親しまれ、喜ばれることを、心から希望してやみません。

昭和四十七年八月二十四日

横関英一

――「江戸の坂東京の坂」の著者――

東京文学百景 目次

一 河畔の文学

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
おいてけ堀	永代橋	梅若塚	姥ヶ池	牛島神社	岩井橋	今戸橋	石浜神社	綾瀬川	浅草御蔵跡碑	朱楽菅江辞世歌碑
37	35	31	29	27	25	22	19	17	15	12

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12
日本橋川	中洲	佃のわたし跡	長命水石文	建部綾足自画像句碑	新大橋	白鬚神社	島崎藤村旧居跡	山谷堀	慶応義塾創建の地	清澄庭園	木場	亀島河岸	海水館跡	奥の細道首途の碑	奥州街道跡

76	73	69	67	64	62	60	58	56	54	52	50	47	44	41	39
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

二 下町の文学

28 曳舟川跡

29 真崎稲荷

30 向島百花園

31 矢口の渡し

32 柳橋

33 両国橋

79

81

84

87

90

93

34 秋葉神社

35 浅草神社

36 啞蟬坊演歌碑

37 有馬小学校

38 采女塚碑

39 永代寺

40 扇屋

96

98

100

102

104

107

109

41	お馬の墓
42	女塚
43	鑑塔と仏頂交友碑
44	蝸牛庵跡
45	亀戸天神
46	賀茂真淵の墓
47	柄井川柳の墓
48	紀の国屋文左衛門の墓
49	旧国技館
50	黒門
51	西条八十童謡碑
52	猿若町跡
53	忍ばずの池
54	末広亭
55	鈴ヶ森刑場跡
56	泰明小学校

三

山の手の文学

69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57
竜泉寺町	木馬館	明治学院	村田家の墓	水戸街道	松葉屋	福地桜痴詩柱	幡随院長兵衛の墓	鳩ポッポの歌碑	鼠小僧の墓	土蔵相模跡	時の鐘	鉄道発祥の地

176	174	172	169	167	165	162	160	158	156	153	150	148
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70
徳富芦花旧宅	団子坂	滝沢馬琴の蔵書印と筆塚	関口芭蕉庵	焼死者供養五百羅漢像	三宝寺池	三四郎の池	幸田露伴居住跡	九条武子の墓	共同印刷	紀の国坂	釜寺	仮名垣魯文印類	ガス灯の残影	神楽坂	お茶の水堀
213	211	208	206	204	202	200	197	195	193	191	189	186	184	182	180

86	内藤家邸跡	216
87	根津	218
88	白山	220
89	林家累代の墓地	223
90	樋口一葉居住跡	226
91	樋口一葉文学碑	228
92	平河門	231
93	藤村操絶命辞碑	234
94	べに皿の墓	236
95	本郷菊坂	238
96	正岡子規自筆墓碑銘	241
97	三田演説館	244
98	都 荘	246
99	森田草平の墓	248
100	湯島界限	250

一
河畔の文学



千住宿跡

1 朱楽菅江辞世歌碑

墨田区向島・三囲神社

碑面の歌は「執着の心や娑婆にのこるらむよし野の桜さらしな月」というのである。死に臨んで、この世に何一つ執着する心を持ってはいないが、吉野の桜とさらしな月だけは例外だと言っている。

これと同じ歌碑が文京区関口の芭蕉庵にも残っているが、その方は石の剝落がひどくて読みにくい。碑面に刻まれた菅江の筆蹟をよく見ると「の」の字に独特のくせがあることに気づくであろう。俗に「のの字の菅江」といわれたこともなるほどと思われる。彼みずからも「のの字庵」と称したりした。また彼の主宰する吟社を「の一連」と名づけたこともある。門人の中から「の庵」と名乗る者も現われた。

気の抜けたようなぼんやりした状態を「あっけらかん」ということから、「朱楽菅江」などという号を思いついたのであるが、明和の末に初代柄井川柳と交わって、前句附などをやっていた頃、俳号を「貫立」としたために、仲間たちから「貫公」と呼ばれたのがもとである。それを「菅江」と改

親友の会

葉山

のこり

のこり

のこり

朱楽菅江

朱楽菅江辞世歌碑

めたのだが、一時「漢江」と記したこともあった。菅原道真を「菅公」というので、遠慮したのかと思われる。自分のすまいを「朱楽館」とも称した。

菅江は元文五年、江戸四谷に生まれ、幕府御手先与力となり、漢学と和歌を内山椿軒に学んだが、唐衣橘州や四方赤良（大田蜀山人）とともに狂歌三大家に数えられるようになった。寛文十二年に六十歳で死去。墓は中野区上高田の清源寺にある。主な作品には次のようなものがある。

潮 干

やれやれと潮のひるめしいそぐなり青うなばらのへるにまかせて

歳 暮

たちて見し柱暦もねころんでよめるばかりに年は暮れにき

月

あまのはら月すむ秋をまふたつにふりわけ見ればてうど仲暦